



# 幼児の 教育

家庭・保育所・幼稚園

好評発売中!

# 手づくり アンパンマンが いっぱい★ イベントおしらせ デコレーション

千金美穂・尾田芳子 共著

大人気シリーズ『手づくりアンパンマンが  
いっぱい②ルームデコレーション』の続刊です。

色画用紙から生まれたアンパンマン  
ワールドの仲間たちが、季節のイベントを  
にぎやかにおしらせします。  
アンパンマンたちと一緒に、  
園生活を楽しく  
盛り上げて  
くださいね。



定価2,100円(税込)  
26×21cm 96頁

★ 巻末の型紙をコピーして、  
簡単に製作できます。

★ 型紙の組み合わせ次第で  
いろいろなバリエーションを  
作ることもできます。



## 【既刊】手づくりアンパンマンがいっぱい

- |               |       |                |      |
|---------------|-------|----------------|------|
| 1. グッズ・プレゼント  | 島田明美  | 5. 通園グッズ       | 島田明美 |
| 2. ルームデコレーション | 千金美穂  | 6. つくってね あそんでね | 島田明美 |
| 3. ぬいぐるみ・おもちゃ | コッペ平沢 | 7. つくってね あそんでね |      |
| 4. ランチとおやつ    | 大森いく子 | パート2           | 島田明美 |

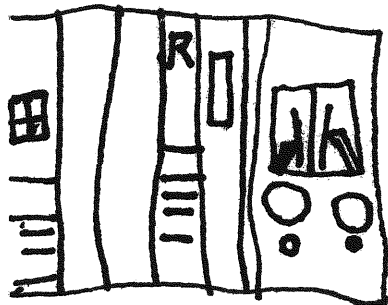
キンダーブックの

## フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第105巻 第5号

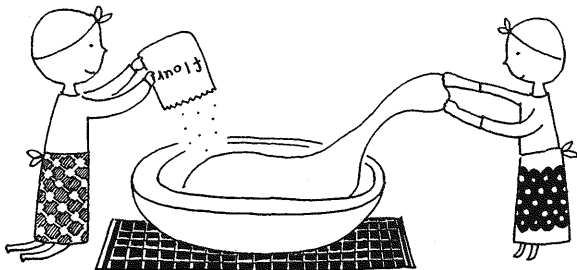


# 幼児の教育 目次

— 第一〇五巻 第五号 —

© 2006  
日本幼稚園協会

巻頭言 診断名がつかないと子ども理解はできないか? .....	山崖 俊子	(4)
端午に寄せて — 五月飾りのはなし — .....	林 直輝	(8)
親子関係を Gewalt という視点から考える .....	小玉 亮子	(14)
児童学からの出発(2) 子どもの魂との対話 .....	安島 智子	(23)
前進のイメージ .....	津守 眞	(32)



私<sup>が</sup>通った幼稚園・保育園(12) 茶の間の隣が幼稚園……………小林 美実…(38)

カリフォルニア滞在記(二) ―ミルズへ行く―……………岩立 京子…(44)

幼稚園百三十年記念企画 アーカイブズ『幼児の教育』(1)……………(53)

もう いっこ……………村石理恵子…(58)

表紙絵／さのまきこ

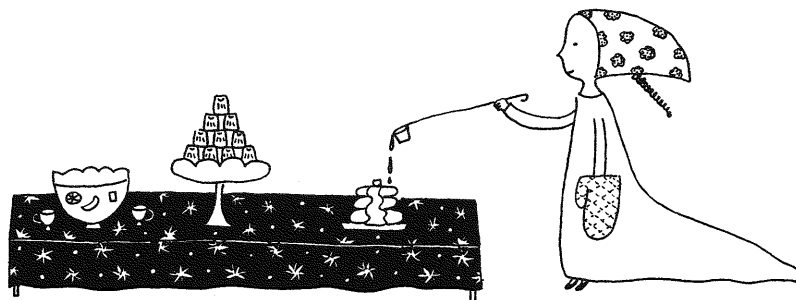
扉題字／津守 眞

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／さのまきこ

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子

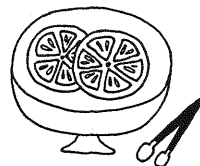
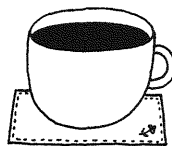


# 診断名がつかないと 子ども理解はできないか？

山崖 俊子

筆者は大学で学生相談を担当しているが、最近とても気になる学生がいる。それは抑うつ状態を呈し、目の前の課題にも手をつけられず疲弊しきった様子、そして何よりも人とかかわりに恐れを抱く学生の姿である。

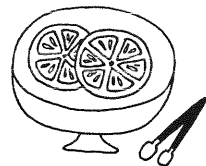
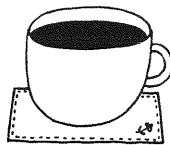
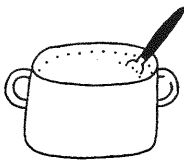
いわゆる「うつ病」ではないので薬が効果的に働かないし、ゆっくりゆっくり話を聞いていくとこれまで教師からも友達からも排除されることが多かったようである。自分なりに一生懸命やってきたつもりなのにどうもとんちんかんな、場に相応しくない態度・行動をとっていたらしいという。勉強だけはよくできたので大目に見られた部分と、逆にこれだけできるのにその態度は真面目にやっていない証拠だと怒られる場合とあったようだ。



ある学生は面接場面で迷路や幽霊や顔のないお化けばかり描いていたが、あるとき幼稚園での記憶を辿りながら次のような話をしてくれた。「死んだはずのためにお墓を作ってあげましょう」と先生から言われたが、お墓が何たるかさっぱりわからず自分なりに何かを作らなければと砂場で山を作っていたら先生から何やってると叱られたと。年長児でお墓を知らないというのも問題かもしれないが、知らなければ知らないで周囲の子どもたちを真似るなど、それなりの合わせ方ができるはずだ。彼女に欠けていたのはそういう臨機応変さである。一方で彼女は平仮名・カタカナ・そして多くの漢字の読み書きができ、古文を讀んじ、ヴァイオリンを弾き、算数の九九も間違いないでできたという。先生からみるとこのバランスの悪さは信じがたく、親の知育偏重の賜物と快く思わなかったのも無理からぬことだったかもしれない。しかし彼女はいたく傷つき、以来、どこにいても他人の目につかないよう、目立たないように行動するのが習慣となったという。

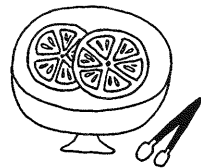
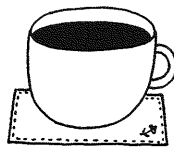
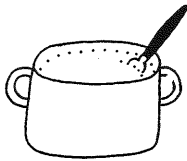
小学校にあがっても勉強はトップだったにもかかわらず先生の覚えは悪く、結果、友達からもはじかれることが多く、先生・そして友達が怖くてしかたなかったという。

また、ある学生は新学期を迎えるたびに調子が悪くなり状況に慣れるにつけそれなりに落ち着きを見せるのだが、日々の課題をやらなければいけないと思いがらかなか取り掛かれずに何時間もボーっとしたまま時間が過ぎていくといった、抑うつ状態が続いている。幼稚園・小学校はそれなりに元気に過ごしたというが、彼女の生い立ちは大変な努力によって維持されていたことがわかる。例えば、ピアノが非常に上手かったようだが、



一度聞いた音はしっかりと記憶されその記憶を頼りに弾いていたが、楽譜を見ることをきつく指導され、楽譜を読めない彼女は先生の指示に従って顔だけは上を見て弾いていたという。幼稚園でも学校でも今、何をするかが期待されているかがわからず、質問するときちゃんと聞いていないからと却って叱られるので彼女なりに行った工夫はそつと周囲を見回し、真似をするという方法だったという。七夕で短冊に将来なりたいたいものを書くよう言われたが全くわからず、隣の子が看護婦さんと書いていたのを盗み見し同じように書いたという。大学進学に当たってもやりたいと思うものがわからず、英語はいつも高得点だったので先生の勧めに従って英文科にしたという。しかし彼女は英語がわからないといつも落ち込んでいる。どのようにわからないかを詳細にきいてみると、例えば「often」しばしば」は知っている。しかし「しばしば」とは何を意味するかがわからないのだという。このように彼女は幼稚園や学校ではひたすら抜群の記憶力を頼りに、周囲の期待にたがわぬように、いわば外的適応だけを目指して生きてきたらしい。

以上紹介した彼女らは今ではしっかりと診断名がつくはずである。「高機能自閉症あるいはアスペルガー症候群」などと。幼稚園や小学校では今、こうした子どもをすばやく発見し、特別支援教育の流れに乗せることが強く叫ばれている。学校に配置されているスクールカウンセラーの研修ではこうした軽度発達障害といわれる子どもの鑑別力が特に求められている。確かに彼らはふざけているわけではない、怠けているわけではない、親が悪いわけでもないのだから誤解を避けるためにはいち早い診断によっていわゆる二次障害を軽

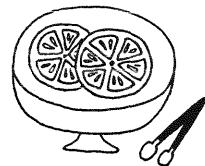
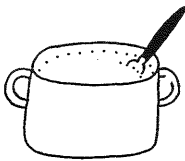




減できるというわけである。わからないわけではない。しかし、である。子どもの心を理解し指導する専門家である、保育士等幼児教育に携わる人が目の前の子どもの行動をどういう気持ちで行動しているかがわからず、結果であるできなかったかということしか見えていないというのでは専門家としての「資格」を返上した方が良いのではないだろうか。

もちろん子どもの病気の中でその診断が一分一秒を争うものもあり、その診断によって明らかに治療効果が有効であるものもある。しかし、知的発達遅れの遅れも含めて発達障害の診断はそういうものではないことは自明の理である。保育者の中には勧めに従って病院に行こうとしない親をひどく責めるものも少なくない。「この子は遅れているわけではない。ゆっくりなだけだ」と言い張る親を事実を認めようとしないう親と快く思わない傾向は強い。親と専門家である保育者とは子どもに向かう姿勢は自ずと異なるのだ。まさに「あるがまま」の子どもの姿を誤りなく受け止めることが保育者の仕事だ。これまで見たこともない子どもの姿に出会ったとき慌てるのは当然である。しかし保育者はすばやく立ち直り冷静に子どもを見ることにより、行動の意味が見えてくるはずである。保育者にとって経験のない子どもの行動をすぐさま「異常」とか「ふざけている」といつて排除したり咎めたりすることだけは厳しく戒めよう。診断名を求める心は不安になることを避けたい心に他ならない。ペーター・ヘルトリング著『ヒルベルという子がいた』（偕成社）が参考になる。

（津田塾大学）



# 端午に寄せて

— 五月飾りのはなし —

林 直輝

## 端午の節句とは

現在、「五月五日は何の日でしょうか？」と質問すれば、ほとんどの人は迷いなく「こどもの日！」と答えられることでしょう。同じように「三月三日は？」ときけば、「ひなまつり」と答えるはずですが……。ヒドイものになると、雑誌などに「五月五日はこどもの日。端午の節句でもあるこの日……」といった表現まで目にする場合があります。ゴールデンウィークで嬉しいのは解かりま

すが、国民の祝日「こどもの日」が制定されたのは、昭和二十三年。ただか五十余年のことにすぎません。その祝日に五月五日が選ばれたのは古来、男児の誕生を祝い、健やかな成長を祈る端午の節句の日であるからに他ならないのです。

その「端午の節句」がわが国において行われるようになったのは奈良時代からといわれ、中国より伝わったものと考えられます。「節句」は元来、「節供」と書き表し、季節の変わり目などの節目に神に供える食物を意味

していましたが、のちに節日そのものをも指すようになりました。

春夏秋冬いろいろな節日のなかで「端午」とは、月の端はための午うまの日を意味し、当初は五月に限ったものではありませんでした。これが五月五日に定着したのは、午と五の音が通ずることによる混同と、中国において月と同じ数の重なる日を「重日」として忌み嫌う思想があり、なかでも季節柄、疾病の流行を促しやすことから「悪月」とされる五月は、一層の災厄除去の必要があると考えられたためです。端午の節句を「菖蒲の節句」ともい、その行事に菖蒲が欠かせないのは、剣のような葉の形と強い香気に破邪・長命の力があるとされたため、これも中国から伝わりました。

日本では五月はまた、田植えを前にした重要な時期にあたります。身の穢れを祓い、豊作を祈願するという古来の農耕儀礼は、中国の風習を受容する素地となつて、ここに日本の「端午の節句」が生まれたものと思いま

す。しかし、この端午が今日のような男児の節句となるのは、まだずっと後のことなのです。

### 古代の習俗さまざま

日本における端午の節句に関する記録として、古くは『日本書紀』推古天皇十九年(六一一)五月五日の薬やくり獵りょう(薬草採取)、『続日本紀』聖武天皇・天平十九年(七四七)五月五日の騎射走馬(馬を走らせて弓を射る競技)、菖蒲かつら(廷臣が冠に菖蒲をつける)などがみられます。

これらの行事・風習はつづく平安時代にも御所で行われ、また次第に民間の模倣するところとなつていきました。菖蒲を屋根に葺く「軒菖蒲」は現在でも一部に残っていますが、『枕草子』にも御所はもとより庶民の家々にいたるまで広く行われていたことが記されています。

御所ではまた、「薬玉」を飾る風習がありました。薬玉は字の如く、蓬や菖蒲など災厄を祓うとされる薬草を

球形にし、これも災厄を祓い長命を保つとされる五色の糸で結び垂らしたものです。のちには季節の美しい花が加えられ、さらに造花で作られるに至りました。このように、魔除けの意味だけでなく、室内に掛けて観ることを念頭に置いた薬玉は、最初の五月飾りといえるでしょう。

鎌倉時代になると、端午の節句は武家を中心として盛んになります。そのあらわれのひとつが飾甲冑かざりかちゅうの登場です。端午の節句に甲冑（鎧兜）を飾った最古の記録は『増鏡』にみえる建長三年（一二五一）五月五日「所々より御かぶとの花、くす玉など、いろいろにおほくまいれり」かと思われまます。飾甲冑の存在は、「菖蒲しょうぶ尚武」の意味合いが強くなってきたことを示すものと考えられ、武家がその象徴ともいえる甲冑を飾ることは、公家を中心としたそれ以前の端午の節句ではあり得なかつたのでしよう。

つづく室町時代にも、菖蒲の根を刻んで酒に混ぜる

「菖蒲酒」、菖蒲の葉や根を刻んで風呂に入れる「菖蒲湯」、平安以来の「印地打いんじうち」と呼ばれる男児の石合戦など、破邪と尚武の祈りを込めた習俗が盛んに行われました。菖蒲酒や菖蒲湯は今でも馴染みのある方は多いことと思いますが、これらは実に古くからの伝統ある風習なのです。

### 江戸時代の端午

こうした武家社会の延長として、徳川幕府のもとに江戸時代を迎えると、いよいよ今日的な端午の節句がかたちづくられます。室町の習俗を引き継ぎながらも、江戸の端午の節句がそれと大きく異なるのは、そこに男児出生祝いの意味が加えられたことです。徳川將軍家の事蹟の記録である『大猷院殿御実記』寛永十九年（一六四二）五月五日の条には、「けふ家門諸大名より献ずる菖蒲兜を庖所ほうじょへかざり。旗十五本。白旗五本。白地御紋の旗五本。家門より献ぜられし旗五本。高矢倉の前にて

られる。」とあって、のちの徳川四代將軍・家綱の盛大な初節句の有様がうかがえます。

しかも、このように兜や幟旗を飾ることは將軍家や大名家のみならず、すでに庶民の間にまで広まっていたようです。それは、わずか六年後の慶安元年（一六四八）に、五月節句の兜に立派な蒔絵や金具を施したり、高級な糸類を使ったりしてはならない、幟旗に絹を用いてはならない、といった町触がなされ、その奢侈を戒めていることから知られます。

徳川幕府が公儀の祝日として五節句（人日・一月七日、上巳・三月三日、端午・五月五日、七夕・七月七日、重陽・九月九日）を定め、なかでも端午を重視したのは、菖蒲が尚武に通ずることと、武家にとつては跡継ぎとなる男児の出生と無事な成長とが最大の慶事だったからでしょう。しかしながら、その思いは庶民とて同じこと、立身出世を願うところはむしろ庶民の間にこそ強くあつたはずです。

江戸中期頃までの五月飾りは、総じて屋外に飾る「外飾り」が主流でした。それは、五月飾りが武家の戦陣に做つた幟や槍、長刀、吹流などであつたからばかりでなく、外に飾ることによって神の降臨の目印（依代・招代）とする意味もあつたと考えられます。すなわち端午の本義的な意味が具現化されたかたち、それが外飾りなのです。

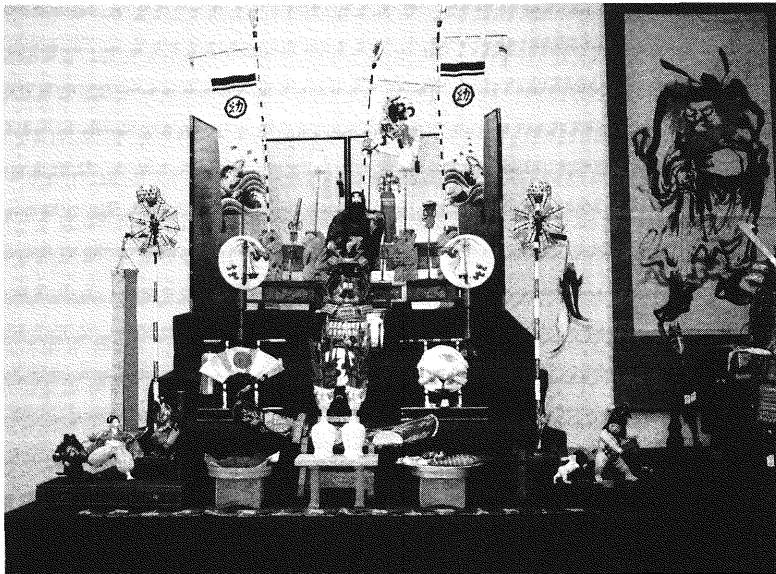
ただし、外飾りの多くは江戸中期以降、次第にミニチュア化して屋内に飾られるようになります。往来に面して飾っていた大きな兜や武者人形が内庭や縁側に引込み、ついには座敷に並べられる「内飾り」に変化した理由には、奢侈を戒め、大火を懼れた幕府の禁令のみならず、文化の爛熟とともにより工芸的で精巧なものが好まれるようになったという自然の成り行き、そして、江戸中期から後期にかけて急速に発達した上巳の節句の雛人形・雛道具の影響もあつたことでしょう。高度な工芸技術と豊かな庶民文化を背景として完成された江戸後期

の五月飾り。これこそ、現代の五月飾りの原形となったものなのです。

内飾りが広まる一方で、外飾りも全く廃れてしまったわけではありません。勇壮な武者絵を描いた幟や鯉幟に代表されるように、屋外の幟旗類はむしろこの頃から一段と盛んに立てられました。なかでも鯉幟は江戸っ子のアイデアと伝えられ、中国黄河の急流を登りきった鯉が龍になるという「登龍門」の故事にちなんで創られたと考えられます。鯉幟は今日もおお五月の風物詩として欠かせない存在であり、男児の出世を願う象徴としてまことにおさわししい、ユニークで見事な造形といえましょう。

### 近代そして現代へ

さて、明治の端午の節句と五月飾りも江戸時代のそれと大差はありませんが、維新後は新政府によって旧幕時代の五節句が廃止され、また西洋の文物が急速に流入し



▲お茶の水女子大学附属幼稚園の五月飾り

たこともあって、一時衰えました。しかし極端な西洋一辺倒から次第に落ち着きを取り戻す明治三十年頃には復活。雛祭とともに旧幕時代を凌ぐほどの興隆をみせました。

ところが、大正・昭和戦前とますます盛んな感があつた端午の節句に、またしても危機が迫ります。それは昭和二十年の敗戦後のこと、五月飾りの甲冑や刀をはじめとする武器類を軍国主義の産物と決め付ける見方が浮上してきたのです。そうした意見は今日もまま聞かれますが、そのほとんどは端午の由来を無視した、極めて短絡的なものといわざるを得ません。端午の節句が災厄を祓う行事であること、そのために身を守る象徴として武器を飾ってきた伝統を知れば、それらが忌まわしい戦争を賛美するものでないことは明らかでしょう。しかも五月飾りは、みな日本の工芸の粹を集めるものばかりなのですから。

表面的な私たちのみに囚われるのではなく、そこに込

められた本義をしっかりとみつめることが大切であると思えます。

### おわりに

風薫る五月。澄んだ青空と鮮やかな新緑のなかに鯉幟が泳ぐさまは、日本を代表する美景といっても過言ではないでしょう。永い間、日本人が共感してきたこの美意識も、戦後の無節操な開発や生活様式の変化などの影響を受け、いまや懐かしき過去の存在となりつつあります。

あらゆる面において心の荒廃が叫ばれる現代、幼い子どもたちの幸せを祈る節句行事はなお一層意義深いものがあるのではないのでしょうか。その「まごころ」が子どもたち一人ひとりに正しく伝わることを願ってやみません。

(吉徳資料室 学芸員)

# 親子関係を Gewalt という視点から考える

小玉 亮子

## はじめに

私たちはこれまで、親子のありようを愛とか愛情と  
いった言葉で語ることが多かったのではないだろう  
か。それに対して、愛ではなくて、権力や暴力という  
言葉で親子関係を語ることに対しては、やはり  
どこか違和感や抵抗感をもってしまおうように思う。親  
自身はもとより、子どもに接することの多い大人、す

なわち、保育や幼児教育に携わるものにとって、親子  
関係を権力や暴力という言葉で語ることに、非常な  
抵抗感があるのではないだろうか。

しかしながら、以下ではあえて、権力や暴力という  
言葉を使いながら、親子関係について考えてみたいと  
思う。もし、そのことによって、気がつくことがある  
ならば、親子関係にとってまちがいないそれは重要な  
ことだと思うからだ。



## 1. Gewalt (ゲバルト) という言葉から

権力という言葉は、『広辞苑(第五版)』では、「他人を押さえつけ支配する力。支配者が被支配者に加える強制力」となっている。この定義はきわめて多義的で、いろいろな局面に使い分けられることが予想される。例えば、英語にする「powerやforce」あるいは、authorityであったりするのだが、ここでは、さしあたり、ドイツ語のGewalt(ゲバルト)という言葉 を想起してみたい。

といったとたんに、ますます、眉をひそめる大人たちがいるのではないだろうか。というのも実は、ゲバルトという言葉は、国語辞典などにも載っているような日本語として使われる言葉でもあるからだ。例えば、『広辞苑(第五版)』にも掲載されていて、そこでは、「威力・暴力の意」国家権力に対する実力闘争。ゲバ。主に学生運動でいう」となっている。こういった

た日本語での使われ方では、ゲバルトという言葉は、大人と子どもとの関係を考えようとする試みにとつて、あまりに不適切に思われるのは当然のことである。

しかしながら、もちろんドイツ語のGewaltには、このような日本語での使われ方のみでない、多様な意味が含まれている。試しに、『新コンサイス独和辞典』でGewaltを引いてみると、「権力、権限、支配力、制御」等といった訳語があることがわかる。そして、注目したいのは、そこには、die *altenliche Gewalt* という言葉があり、それは、日本語では、親権という意味であることが書かれている点である。

実は、注目したいのはこの点である。現在、親権という言葉は、親子関係を表す重要な言葉として広く人々に認識されているといっているだろうか。たとえば、それは、離婚の場面などでよく耳にする。離婚に際して、親権はどちらの親がとり、養育権はどちらがとつた、等々。

「Gewalt」という言葉こそが、日本民法の「親権」のドイツ語の語源に他ならない。この親権を日本において最初に規定したのは、明治民法であり、大幅な改正はされたとはいえ、それが現在の民法の一定程度基礎を形づくったといってもいい。この明治民法は、当初はフランスモデルで構想されていたのだが、それを廃棄して、ドイツモデルでつくられたことはよく知られるところである。つまり、近代日本民法における親権の語源はドイツ語のGewaltであったということができる。

ただし、実をいうと、現在のドイツの民法には、die elterliche Gewaltという言葉はない。一九七九年になされた民法改正以降、Gewaltという言葉は使われなくなり、代わって今では、Sorgeという言葉が使われるようになっていた。Sorgeとは、英語でいうとcareやworryにあたる言葉で、配慮、世話、あるいは、心配といったことを意味するのである。ドイツ語で

も、親子関係にGewaltを使うのは時代に合わないと考えられるようになったために改正されたといつていいだろう。

とはいえ、つい最近までGewaltという言葉が使われていたこと、そして、もともと親権が親の絶対的権力、すなわち生殺与奪の意味をも含みこんでいたことを思い起こすことは重要であると思われる。

## 二、出生と暴力をつなぐ理解について

この「生殺与奪の権」という言葉は、古代ローマ法における親権がいかに強大なものであったのかを示す表現である。つまり、法的に子どもの生命さえ、親の自由になるということを表している言葉であるといつていい。もちろん、このような強大な法的権力は、それほど時を待たなくても、きわめて早い時期から縮小



化していく。法制史の語るところによると、親の子どもに対する権限の絶対性は、国家がその形を整えるにすがって制限されてきたのである。

ドイツの *die elterliche Gewalt* という言葉が *Sorge* に変わったのは、まさに、その強大な権力が今日限りなく弱められたことを示すということもできよう。

しかしながら、親権が *Gewalt* という言葉で表されてきたということは、それが、権利であると同時に、暴力という言葉にも置き換えうることをしめしている、といったら言い過ぎであろうか。

今日、もちろん、かつてのような生殺与奪の権としての親権は、法的にみとめられていない。しかしながら、現在の親たちには、まったくそのような権力ないし、暴力の発露がないかといえば、必ずしもそうではないのではないだろうか。そのことについて、示唆的な議論を展開している人の一人に、芹沢俊介がいる。

「どうしてこんな身体に生んだのか」。

芹沢は、こういう子どもからの問いを「イノセンス（責任がない）」という言葉に置き換えつつ、親子関係の圧倒的な非対称性、すなわち、子どもの側の「根源的受動性」を明らかにしている。<sup>2)</sup>

すなわち、それは、芹沢の言葉によれば、「受胎から生誕に至る過程に少しも自分の意思が関与していない」という意味」であり、「生んだこと、生んでしまったことの暴力」であるという。

同じ受動性を明らかにしたものに、吉野弘の詩がある。

少年の思いは突飛しやすい。その時 僕は  
へ生まれる」ということが まさしくへ受身」で  
ある訳を ふと 諒解した。僕は興奮して父に話  
しかけた。

——やっぱり I was born なんだね——

父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

——I was born so。受身形だよ。正しく言うとなんて聞かせるんだ。自分の意思ではないんだね——(吉野弘「I was born」<sup>3)</sup>より一部抜粋)

吉野のこの詩は、国語の教科書にも掲載された有名な詩であるが、学校教育の場でそれがとりいれられたのは、この詩のすばらしさのみならず、この詩のテーマが、子どもの出生によって命をなくした母と母への子どもの思慕(あるいは感謝を)を描いたものであったからだ。しかしながら、詩のすばらしさがよりいっそう、母を失った子どもにとって、その出生と同時に、母を自分の誕生のせいで失ったという状況の二重の抗いがたさ、あるいは、回収し得ない暴力を描いているといったら、それはあまりに不適当な解釈なのだろうか。

### 三、命名と権力について、二つの物語から

出生に関して子どもにはなんら決定権がないことは見てきたとおりだが、加えて、一生かかえていくであろう自分の名前にもなんら関与できないことを考えてみたい。

日本の作品としてアカデミー賞の一つをとったことで記憶に新しい宮崎駿監督のアニメ映画『千と千尋の神隠し』では、名前が重要なテーマであったことは、多くの人の知るところである。この映画のストーリーは、両親とともに異世界に迷い込んだ主人公の十歳の少女、千尋が生き延びて、豚になった両親を救うために神様の湯屋で働くというものである。働くにあたって、千尋は湯屋の経営者である湯婆婆と労使契約を結ぶが、契約書に書かれた千尋の名前をみた湯婆婆は、次のように言う。<sup>4)</sup>

湯婆婆「ふん、千尋というのかい。贅沢な名だ

ね。」

千尋  
・・・

湯婆婆「いまから、おまえの名は千（せん）だ。」

「いいかい、千だよ。わかったら、返事を

するんだ、千！」

こうして、主人公の千尋は自分の名前を奪われ、千として働き始めることになる。そして、千は自分の力で働き、勇気をもって困難に立ち向かい、最後には、自分の力で千尋に戻ることにするというストーリーとなっている。

とはいえ、この物語の中で、「名前を奪われる」のは主人公だけではない。主人公の味方となって力を貸す少年ハクもまた、名前を奪われていたことが、物語のなかで明らかにされている。少年ハクは、千尋を助け、みまもる存在であるが、最後には、千尋によって

自分の「ほんとうの名」を取り戻している。

こうして、名前を奪われ、それを取り戻す、ということがこの物語の基調となっているのであるが、ここでは、奪われることではなく、視点をずらして「名前を与える」ということの意味を考えてみたいと思う。

主人公の千尋が名前を奪われると同時に千という名を与えられたとき、名前を与えた湯婆婆の支配下に位置づけられることになる。名前が与えられることで、その世界における位置が与えられる。その世界において承認されるといってもいいだろう。そして、名前が与えられることで、名前を与えたものの支配下に入ることができるといえる。こう考えると、この映画では名前を与えるものと与えられるものとの関係を、とても明確に描いているといえる。

実は、宮崎駿監督の別の作品で、名前を与えることについて同じような構図が描かれているものが他にも

ある。それが、『風の谷のナウシカ』である。この物語は「火の七日間」と呼ばれる戦争によって人間たちの文明が減じたのち、ほそぼそと生き残った人々の中に生まれ、さらにやってくる人類滅亡の危機を救おうとするナウシカという少女の物語である。映画は七冊ある原作とは異なるが、映画にはならなかった原作の中に、名を与えるシーンがある。ここで名前が与えられるのは、千尋とちがって主人公のナウシカではない。

物語は、争いを繰り返している人間たちによる最終的な破滅に直面して、なお、ナウシカは人々を救う道を探すというものである。物語の中で、かつて文明を滅ぼしたのが、巨神兵と呼ばれる兵器の一つだったという設定があり、ナウシカが最後の危機に直面するに際して、この巨神兵の一つが長い時代を経て、何もかも忘れてまるで生まれたての赤ん坊のようによみがえる場面がある。巨神兵のあらたな覚醒に立ち会うナウ

シカは、次のように語りかける。<sup>5)</sup>

ナウシカ「私のいいつけを守って立派な人になり

ますか」

巨神兵 「ナル リツバナヒトニナル」

ナウシカ「ではあなたに名前をあげます 私は風

の谷の族長ジルの子ナウシカ そなた

はナウシカの子 オーマ」

こうして、ナウシカに名前を与えられることよつて、巨神兵はナウシカの世界における社会的位置と役割を与えられることになるのである。この後、巨神兵は、ナウシカの指示に従って、人類の最終的な破局を避けるべく行動していく。

湯屋を支配する湯婆婆と、人類の救世主たるナウシカと、それぞれのストーリーの中で置かれた位置はまったく異なるものである、しかし、湯婆婆と千の関

係、ナウシカと巨神兵との関係は、名前を与えるものと名前を与えられるものの関係であるという点で同じだといえる。そして、そこには、やはり指示するものと従うもののある種の権力 (Gewalt) 的關係があることが明らかになっているのではないだろうか

#### 四、おわりに

この二つの物語によって示唆されることは、「名前を与える」側と「名前を与えられる」側が対等ではないという点である。別の言葉を使うならば、そこには、当該社会の秩序を示すものと秩序に従うものの關係があるということもできる。現在では子どもの名づけについては、「子どもの名前は親の最初の愛情表現」というような言説がみられるように、親のわが子への思いを託すものとみなされている。また、子どもの名前は、ほぼ両親、または父親ないし母親が決定しているといってもいい。とはいえ、古くからそれは親に

よって独占されていたわけではない。少し前の世代では、祖父母や親類、あるいはお坊さんといった地域の尊敬されている人が子どもの名前をつけることは珍しくなかったし、制度としての名づけ親もあった。この名づけ親という制度は、親子關係以外の擬似親子關係をむすぶことによつて、子どもを取り巻く環境が複雑化される契機になっていたともいえよう。すなわち、子どもが社会の秩序に組み込まれるにあつて、親以外のルートが保障されていたといつてもいいだろう。ところが、現在では子どもに名前を与えるのは、もっぱら親である。つまり、今日、子どもを社会に結びつけるルートは、子どもの人生の始まりにおいて、親だけが独占しているということができよう。

ニーチェは、「これはこれこれである」と名前を与えることは、それを「占有」してしまふことだと述べた。そういえば、ちいさな子どもは自分のぬいぐるみに名前をつける。そのことによつて、親のものでも兄

弟のものでもなく、それが自分の占有物であることを主張しているともいえる。

先に、名前をつけることは秩序を示すものと秩序に従うものの関係を生じさせることだと論じたが、ニーチェの言葉に従うならば、あるものに名前を与えるという行為は、そのものを自らの占有下におくことと同じ意味となる。<sup>6)</sup> すなわち、名前を与えるものと名前を与えられるものの間には、まさに権力関係があると  
いっている。

現在では、Gewalt（権力・暴力）という言葉は、もはや、法的な親子関係を語る場面で使われなくなった言葉である。しかし、親子関係の関係をその成り立ちから考えるならば、それはなお、決して回避できないテーマであるといえるのではないだろうか。しかも、出生という最初の場面で、子どもを社会に結びつける回路がもつばら親に限定されているような現代においては。

## 付記

本稿三および四は、小玉亮子「名前と社会の様々な関係」木村涼子・小玉亮子共著『教育／家族をジェンダーで語れば』（白澤社 二〇〇五）より、一部を改訂したものである。詳しくは本書をあわせて読んでいただければ幸いである。

（横浜市立大学）

## 引用文献

- 1) 小玉亮子「近代ドイツの親子関係と懲戒権」牧柁名ほか編『懲戒・体罰の法制と実態』学陽書房 一九九二
- 2) 芹沢俊介『母という暴力』春秋社 二〇〇一
- 3) 『吉野弘詩集』角川春樹事務所 一九九九
- 4) 宮崎駿『千と千尋の神隠し』第二巻 徳間書店 二〇〇一
- 5) 宮崎駿『風の谷のナウシカ』第七巻 徳間書店 一九九五
- 6) ニーチェ『道徳の系譜』岩波書店 一九四〇



## 子どもの魂との対話

安島 智子

近年の少年犯罪や児童虐待、大きな災害の被害報道から度々耳にする子どものPTSD（心的外傷ストレス障害）、トラウマといった専門用語は、心理療法に対する認知度を高め「カウンセラー」への期待は高まりつつあるといえる。けれども「魂の影の世界」に操られて自分の意思ではどうすることもできず苦しむ子どもたち、人格の形成や成長を阻み、本人のみならずまわりの人々にも多大な苦しみをも

たらす「子どもの傷ついた魂」とまっすぐに向き合うことが、どんなに厳しく困難で危険を伴うことか、想像できるだろうか。

子どもを脅かす「魍魎ちみもろりょう」をも自由にさせるといふ相談室で、「私は日々、病を入り口に闇に招かれ、光に向かうことから得る豊かさに感動させられております」「苦しくて苦しくて本当に辛いということはありませんけれど、プレイセラピーの過程に

は、この子と出会った嬉しさやこの子と出会って魅せられるというのが、辛くてもあると思います」と、凜と語る安島先生。児童学を出発点に心理療学家として研鑽を積まれた後、十九年前にたった一人で『このはな心理児童学研究』を開き、「子どもの魂」の地平に共に立ち続けてきた安島先生の、現代の子どもの「病み」から見える心の「闇」についてのお話を紹介したい。

——『このはな心理児童相談所』は一九八七年に日本橋で創設され、心理相談室では子どもの心理療法を中心に面接などしてこられたそうですね。「このはな」の命名の由来はどこにありますか。

安島「このはな」は、古事記に出てくる母親と子どもを守り神、木花咲耶姫（このはなさくやひめ）のことです。浅間神社に祭られている女の神様で、海幸彦・山幸彦の母親です。当時、私のなかで「母親

と子どもを守る場」を産みたいという願いが無意識にあったのでしょね。

——先生のところには、どんなお子さんが相談に来られますか。

安島 最近、公立の相談所や大学で無料で臨床を受けつけるところがたくさんあります。でも、有料のここでは、お金がかかっても子どもを連れてきたい人、無料のところへ行ってもなかなか満足しない、高くても、ここだったら納得するという方たちが来られるので、それだけモチベーションが高いと言えそうですね、ケースとしては非常に難しい、現代的なケースが多いのではないかと思います。たとえば、自閉症、「落ち着きがない」子ども、「切れる」子ども、不登校児、「お腹がいたい」、チック、吃音、強迫症状が強い子ども、など様々です。特に、自閉症と呼ばれる子どものセラピーには今まで力を注いできました。自閉症の子どもにとつ

て、本人を脅かしている世界の表出と「身体」感覚の獲得をもたらす関係身体体験がとても重要です。本当のことはセラピーが終わってみないとわからないのですが、幼児期に来談されると、心理療法は大変効果を上げるとは確かだと思っています。

——遊戯療法に精力的に取り組まれているようですが、臨床の場面において子どもの「遊び」はどんな意味をもつのでしょうか。通常の心理療法では、言語を媒介にして治療が進められるそうですね。心身の機能が未分化で自我の発達の不十分な子どもには、大人とは異なる配慮が必要で、その場合「遊び」そのものに治療的な意味があると伺いましたか。

安島 昔は、遊戯療法というのは、遊んでいれば子どもはよくなるという発想しかなかったのです。けれども実際には、子どもはセラピーの中でも一番難しい。普通はクライアントに対して、九十度あるい

は対面で面接をすることが多いのですが、子どもに對しては三百六十度です。子どもと、どの距離で、どんなかわり方をするのが、最もこの子がこの子としていられる関係性になるのかということが、まず臨床の基本といえます。

プレイルームで遊ぶということは「内界を遊ぶ」ことを意味しています。子どもが心の中をすべて遊びにすることによって、遊びの中で、心の中の苦しさを、どうすることもできない破壊的な世界や恐怖、いろいろな化け物のファンタジーが、一つひとつ表現され、その意味がよく理解される。遊んでも遊んでも、セラピストがその意味を理解できずに、その遊んだ破壊性や、恐怖や、どうしようもなくいてもたってもいられない身体感覚を我がこととして受けとめられない限り、その子の中からその苦しみが去ってはいかない。その場合、発達心理学のみならず、精神分析や分析心理学のような深層心理

学、関係性の心理学がわからなければ、子どもの臨床はもちろんできないといえます。

たとえば、自閉症の子どもに対しては、身体レベルでは強力な関係をつくれるけれども、この子の心にびったり重なってあげないと完全に拒否をされるということも体験してきました。「サイコドラマ」でいう「ダブル」をして、その子と重なりながら、もう一つはもつとクリアな理性的な自分もいますから、重なりながらわかったことから、周囲で今、この子は何にまなざしがいついて、それはどのぐらゐの持続性がある関心事で、この子がずつとどまっているところは何かを理解する。今、ここで、この子がまなざしを向けているそのおもちゃと何をしようとしているかを瞬間的に見ぬきながら、かつセラピストは次の遊びの展開がどうなるか考えるわけです。児童学科在学中は、意識を五つに分けるというトレーニングをさせられました。その「サイコ

ドラマ」で学んだ補助自我の技法が今とても役立つています。

発達障害の子どもは、「ごっこ遊び」

「ご遊び」ができるということが一つの終了、重要なポイントといえます。そして、「ごっこ遊び」というのは、おうちの中だけではだめで、このプレイルームで「コーナー間交差ができる」、レストランがあつたり、お店屋さんがあつたりするコーナー間遊びがこの部屋の中でできると、学校生活へ帰っていきけるのです。現実社会の中でもコーナー間交差ができるパーソナリティーになるわけです。

私は、個・集団・社会という発想を児童学から学びました。今、個人セラピーのほかに神話や昔話、おとぎ話のような物語のエッセンスを生かし、「ミ



ソドドラマ」という方法を取り入れ、グループ間関係も視野に置いたグループセラピーをしています。個人セラピーをしても必ず、この子が集団にいるときに、集団にはどんなふうにいることができるだろうかということの一つのアセスメントになっている。

不登校児に対しても、クラスという集団から学校という社会で、この子はどこに足場をつくれれば、居場所ができるだろうかという視点が最も大事です。心だけを見ているのではなく、個人の心の中にも集団や社会があつて、それとパラレルに現実の集団や社会があるという認識に立って、子どもと出会ったときに、子ども全体のアセスメントができるのです。

——心理療法師の専門性とは、一言でいうと何でしょうか。

**安島** セラピストの能力とは、子どもの病態の適切な見立てや子どもの現実世界の場であるところの家

庭・学校・地域の状況を把握しつつ、それらの視野において、子どもが表現した「心の世界」を解かるうとし、共に歩みぬくことだと思えます。心理療法は、「心の世界」と取り組み、「心の世界」を創造していく過程です。この過程こそ、現実の自分の人生を創造する過程だと私は実感しています。ですから、苦悩し病むことは人生の創造へと向かうはじまりだと考え、このようなカウンセリングを、私は「創造的カウンセリング」と呼んでいます。

——長年子どもの心と向きあつていて、最近特に変わったなあと感じられるような、気がかりなケースはありますか。

**安島** 今、現代的な臨床のテーマというのは、本当は自分の気持ちはこうなのだけれども今は我慢してしよう、というような抑圧ができずに、突然物を投げるなどのケースです。子どもの心の中に、まったく自分を感じようとする力よりも、その子自身

を破壊していく力のほうが無意識の中で大きくなっているのです、突然物を投げつけてしまったりするわけですね。

その子自身がやりたくてそうしているわけではなくて、そんなことをやる自分というのがとても悲しくて、すごくつらいのだけれども、気がついたら、そうしてしまっているのです。そういう子どもは、目に見える強迫性があったり、鬱になって食事がほとんど摂れなくなっているとか……、そういう意味では、今申し上げたようなケースは、かつてあった「子どもはこういう姿」とは異なる姿の子どもです。子どもの鬱とか、普通学級にいて、普通に学力があつて、普通にやり取りができるにもかかわらず、突然「切れる」状態になってしまうというのは、十年ぐらい前からだと思います。

——そのような子どもの問題行動は、なぜ発生するのでしょう。子どもに起きていることは当然大人に

も起きていて、子どもも大人も病んでいるということでしょうか。

安島 私は、日本という国はものすごい危機の中にあるような感じがします。世界の大国というのは、自給自足ができますよね。日本は、相当早い時期に田畑を荒らして農業を粗末にして、食べることに、耕すこととか、土の底から生きぬいていけるというようなたくましさを失ってしまつて、非常にきれいな上澄みの部分だけでまわっているような気がします。

もともと人間というのは、そういうきれいなところだけじゃなくて、泥もあるし、汚いところもあることを知っているからこそ、下水道・上水道をしっかりとしようとする発想もできる。親たちも、子どもをきれいに育てたがり、生きること、生命から切り離された人工の基盤に足場を置きたがる傾向がある。生活そのものもオール電化して、暖をつくる、

本物の火に当たるといふことも日本人は疎かにしてしまっているので、人間が人間たり得た、動物たり得たといふところのエネルギーは少ないと思うのですね。だから、生きぬく力というのがすごく弱い。私は、学力も小学校入学までの「幼児力」があれば、頭のいい、気立てのいい、生活力のある子どもになると思うのですが、残念ながら、私に言わせれば今の子は「幼児力」がない。六歳までに育っているはずの基本的な力が育たないまま、小学校を迎えてしまっているという子どもが多いのではないかなと思いますね。

——「幼児力」について具体的に説明いただけますか。

安島 たとえば数の概念にしたって、「僕は鉛筆を十円で二本買って、五円で消しゴムを一個買ってこようと思ったので、お母さんに二十五円もらいました」という問いを口で言ったときに、鉛筆二本に対

して十円玉二個の想像がつき、消しゴム一個に対して五円玉が想像つくかどうかということですよ。

こういうことは数の概念の基本で、ビネーの例だと一対一対応ができるかどうかという問題です。それから、二歳の問題で、三つを二つと一つに分ける、そのレベルのことだと思えます。そのレベルのことが、数の概念としても育っていない。

文章題ができないというのは、その一対一対応がついていけないので、すぐ計算式を考えようとする。けれども大切なのは、このお話はどういうお話で、鉛筆が二本ということがすぐ絵に描けるということ、その文章に対応した絵が描けるということですよ。そういうことが私の言う「幼児力」ですね。それは六歳までに十分できてくるはずのことですね。ビネーには状況の不合理を問う問題がありますね。四歳から六歳ぐらいまでを対象としていたと思うのですが、「犬と鳥はどういうふう違いますか」と

いう質問に、犬の姿が思い浮かばない、鳥の姿が思い浮かばない。この問題だけを考えてしまう。

ところが「幼児力」があれば、「犬なんて、タロウちゃんちにいるよ、いつも見てるよ」「決まってるじゃない、四本足に」、「鳥って、スズメでしょう。スズメって朝からうるさいんだ」、「犬は足が四本だけど、鳥は二本しかないから違うでしょう」と答えられる。そういう生きたスズメを感じるとか、犬を感じる力が最近はやっている。

また、雨の中でたばこを吸っているような絵を見たときに、どこもおかしいと思わない。雨の線がおかしいとかね。幼児だったら、雨が降ったらぬれちゃって火が消えるということを知っていると思うのですが。今、火が全部ガスや電気の点火になつているので、外でたばこを吸う不合理性が理解できない。だから、雨の中で寛いでいるのはおかしいという問題に結果的に変わりましたね。一九八七年に改

定したのを、一昨年また改定した。それは、生活が変わってしまったから。今の生活に合わせた問題に変えているのですが、かつてあったはずの「幼児力」が今なくなっている。

結局、生きて感じる力を育てる幼児教育こそが、一番重要な課題かもしれませんね。そして、小さいお子さんを育てていくことになるお母さんたちの心のケア、それを妊娠中から行っていく必要性を今痛感しています。

(このはな、心理児童相談所)

## 後記

臨床相談の場として出発した、『このはな心理児童学研究所』は、今や独立した研究教育機関にまで発展している。安島先生が中心となって、臨床心理士の資格取得を目指す方、大学・大学院で基礎的な



教育を受けた上で更なる実践的技法や専門性を高めようとする方を主な対象に、講演会やセミナー、ワークショップを企画・運営し、学会のリーダーとしての幅広い人脈を活用し、臨床の質を高めるため、大学や学派の枠を超え、それぞれの分野の第一人者が直接指導にあたる研鑽の場を用意している。

心理臨床の基礎的理論の徹底と、遊戯療法・箱庭療法・ロールシャッハ・芸術療法・ミソドラマ・ロールプレイ・家族療法といった多様な技法の習得、事例研究、乳幼児期から老年期までの生涯にわたる課題の現代的意味を心理療法的観点から分析する講座など、どれも魅力的だ。心理相談に加え、後身の育成や学会の運営にも精神的に尽くされている安島先生の存在感に、今回ただただ圧倒されるばかりだった。

「団塊の世代は、この国がどうあるべきか激しく問いつめなくては気が済まない世代」と自嘲気味に語

る安島先生のまなざしの奥には、子どもたちを苦難と絶望の淵に追いやってきた現代社会に対する強い憤りと深い悲しみが宿っているようで、過激なまでに母子の守り手とならんとする古代の女神の姿が重なった。

インタビュー 平成十七年八月一日

聞き手 首藤美香子

#### 参考資料

安島智子「遊戯療法による象徴」『現代のエスプリ』第389号至文堂一九九九年

「創造的カウンセリングの発想と展開」『このはな心理臨床ジャーナル』第七号二〇〇二年

「日本遊戯療法研究大会第六回大会 基調講演『遊戯療法と子どもの魂』」二〇〇二年

「このはな心理療法セミナー」二〇〇五年版パンフレット

# 前進のイメージ

津守 眞

## 三歳から四歳へ

子どもはある時期、急に成長を感じさせる時がある。もはや赤ん坊ではなくなり、日常生活でも、会話でも大人の仲間入りをする。目的意識も明瞭になり、

言語によるコミュニケーションが可能になる。その時点で見直すと、以前からの積み重ねがそれをつくってきたのであることがわかる。その子は、三歳と四歳との間にそういう時があった。

ずっと前にその子が作ったケーブルカーが庭に吊り

下げたままになっていた。「ボクが生まれる前からあったの？」とその子は尋ねた。「ずっと前にババチャンと作ったでしょう」と話したが半信半疑だった。同じ物を見ているのに成長したこの子には違って見えたのだろう。

卵を割って失敗したら、「この次から気を付けた方がいいよ」と言ったり、雨降りに外出する時、「雨だから長靴にしようかな」と言ったり、常識的な過去の体験がある。その反面、幼児は、大人にはすぐには理解できないような行動をする。後になって全体像が見えてくると、この子はこんなことを考えていたのかと、大人とは違う考え方に気付かされる。

### 空間のイメージ

四歳になったばかりのその子は、大人の大きな椅子（積み木ではない）を動かして、ババチャンの場所と自分の場所とをつくった。この子にとってはババチャ

ンは母親の次に親しい存在である。私（ジジちゃん）の場所は離れた別のところにつくった。力を出して大きな家具を移動させて空間をつくりかえるのである。

それから椅子の向きを変えて、脇の棚の上に自分が上れるようにした。「冒険」と言う。子どもがよじのぼって移動できる空間である。それからババチャンの化粧箱（木製でかなり重い）を両手に抱えて動かして食卓の椅子につなげた。その上に乗り、下にもぐり、本棚を作り、じきに何種類もの空間ができた。内に入り、這い、引きずり、押し上げ、降り、上に高く立ち、姿勢を変えるごとに違った空間になる。電話室があり、ババチャンとケータイで話もできる。そこがままたごとの想像の場になった。三十分もかけて力を出して新たな空間をつくり上げたのを見て、私はバシユラーのいう「イメージが生まれ出る瞬間」がここにあると思った。イメージとは「知覚を歪曲し、見えないものを見る力」である。大人には見えないものを子ども

は見ている。それは子どもの遊びによって見えるものになる。同様のことをお茶の水女子大学の附属幼稚園で、むかしからどんなに感動をもつて見てきたことか、また、言葉をもたない愛育の子どもの保育の場でも、同様のことに私はいまも面白く付き合っている。

### いま、二、三歳のころを振り返る

ここに述べた四歳の幼児の空間のイメージは、発生的に見るならば、際限なく以前にさかのぼることができる。生後十か月の時、その子は全身の力を出して鏡台のつまみを引っ張ったら引き出しが開いて、内部の空間が開いた。そこに内部空間の発見の始まりがあった。眠くてふらふらなのに、新しいことを見付けるとキラリと目が光って遊び始めた。その顔は光り輝いていた。

一歳を過ぎて歩くようになった時、その子は台所へ行き、重いリンゴの袋をぶら下げて勝手口から外へ出

たがった。座敷の入り口から中をチラと見て、ここなら知っているぞというようにこちらに戻つて来た。空間の全体を把握した自信をもって、家の中を歩いて回つた。

そんな経過を経て、積み木を積み、自分の思うような空間をつくるようになった。いちどきにそうだったのではない。最初は積み木を一個手に取つて床に置いた。その上に、もう一個手に取つた積み木を置いた。高く積むイメージが最初からあつたとはいえない。同じ場所にもう一個置き、更にもう一個と六個重ねた。そうしたら積み木が崩れた。一つ置いたその同じ場所にもう一つ手に取つた積み木を置くこと、つまり自身存在を確かにして上へと重ねる。高くなるのは結果である。それが崩れる。私がもう一度それを積むことによって、その子は存在を確かにする。このように脇からそれを確かにくれる大人がいなかったら存在への自信は育たないのではないか。

## 赤い自動車の広告を見て感動する

その子が一歳半になった時、その子は朝、私どもの家に来るなり、大きな赤い自動車の広告を見て、ウーと歓声を上げた。そして丸円筒形の積み木を三個並べ、上に立方体の積み木をのせた。一緒にいるうちに、その子は自動車の広告を見た感動を積み木で表現したことがわかった。丸い積み木は車で、上の四角い積み木は自動車のボディだろう。赤い自動車の広告を見て積み木で作ることは何日も続いた。一歳半の幼児が三十分も注意を継続して、ひたすら遊ぶ。ほら見てというみたいにチラと私を見る。ひたすら遊ぶというのは、感心して見ていることを含めて大人と子どもとの共同作業である。この時があつて分別のある幼児後期へと進む。

一瞬間ごとに変化する子どもの生活に追われて一緒に過ごしていた三歳の子どもが、いつのまにか分別あ

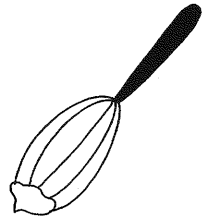
る年齢になる。文字も覚え、数もわかってくる。そうすると大人は区切りのはっきりした教育を求める。いわゆる学校教育の形態が力をもつてくる。だが、今の時代にはそれ以上のものが求められているのではないか。

## 前進する船のイメージ

四歳のこの子の世界に戻ろう。

大きな家具を移動させて空間をつくっていたその子は、粘土をしたいと言う。油粘土がいいと言う。色がついていて、小さな形も手軽に作れる。ジジちゃんには鯛の塩焼きだと言って、粘土で形を作って持つてくる。電気スタンドを二つ持つて二階から下りてきた。こっちは往きの道、こっちは帰りの道と空間だけでなく、時間も自由に行き来できる。テーブルの下の暗い空間にそのスタンドをおいて灯りがつくようにし、通りがかりに鈴に体が触れて鳴るようになってきている。テーブルの下の暗い場所に三個の光ができた。光はい

つでも子どもにとって魅力である。そこにできたのは水族館である。しゃべりながら遊びは延々と続く。昼食の間も席を移動させたり、同じイメージは続く。



最後に、押し入れから扇風機を出して自分でコンセントにつなげて回した。「スクリュー」だと言う。部屋全体が船になってそこに魚がいる。ここまで見てきてこの子の遊んでいる部屋全体が船のイメージになっていたのだとわかった。船が前進するイメージである。もうすぐ棧橋につくと言って、扇風機のスピードを変える。ビニール風船を膨らませてくれと言う。舟の中で遊ぶ用である。私は面白くて子どもと一緒に笑ってしまった。下地になる能力が準備できた時に、それらを駆使して子どもがつくり上げたのは前進する世界のイメージだったのは実に興味深い。

これはただの船のイメージではなくノアの箱船のイメージでもある。数か月前から、私は、アーサー・ガーサート作 小塩節・小塩トシ子訳『ノアの箱船』こぐま社（動物たちが箱船に乗り込む様子が細かく描写されている）をこの子に読んでいた。

イメージとは、その根源をいえば、ほとんど無意識の物質のイメージである。それが言語の力を借りて意識的な想像力となる。嘘つこと知りながら想像の世界に入り、それを遊びに発展させ、それが遊びを継続させる。

世界はよい方向に向かって前進していると子どもが感じるようにするにはどうしたらいいだろうか。基礎学力もたいせつだが、それ以上にたいせつなものがある。

### 希望の見えない現代にどうするか

現在はこれまででなかったほど、希望が失われつつあ

る時代である。知らない人はまず疑えと教える学校教育。そう教えなければならぬような世相。通りすがりに子どもたちに笑いかけても笑い返したら危ないと教える社会。どこか人間の本来の道にはずれているのではないか。

日本だけではない。どこの国にもナショナリズムが台頭し、世界中がその方向に走っている。これまで異人種に寛容だった先進国でも、寛容の徳が失われかけているのではないか。自国のことしか眼中にない、勝ち組と負け組とに分けて、隣人に慈しみの目を向けない世界相。もう一度人間の原点にもどらなければならぬ。

私は紀元前八世紀の旧約時代のイスラエルを考へる。帰るべき場所をすら失った古代イスラエルの人々がバビロニア捕囚の時代、政治的にも経済的にも個人的にも希望の失われた時代に書かれたのが第二イザヤである。「慰めよ、わたしの民を慰めよ」と冒頭に記さ

れるイザヤ書40章。「慰める」とは、相手の心になることである。「頑張りなさい」「修養して立派な人になりなさい」というのではない。いまのままでもいい、「いま」の中に希望を生み出し他人に示しなさいと、「見よ、新しいことをわたしは行う。今やそれは芽生えていく。」と第二イザヤは言う(イザヤ書43章)。

私の学校の十一歳のHくんは、言葉を話さないし、歩くこともできない、食事も一人では摂れないのだが、身体状況のいい時に、私がお子に本を読んであげると目をそらさずにジッと聴いてくれる。聴衆が聴いているかどうかは、語り手にはすぐにわかる。子どもも同様である。この子は表現の簡潔な聖書の物語を好む。それが彼の心に訴えるものがあり、ある時は慰められ、ある時は期待に満ちて次を待つ。イザヤ書がこの子の心に響いているのは不思議である。

(保育研究者)

## 茶の間の隣が幼稚園

小林 美実

私は、昭和七年（一九三二年）に、東京の豊多摩郡中野町、今の中野区に生まれた。青梅街道を少しはずれると、畑や野原や小川があり、大きい農家や味噌醬油づくりの旧家が残っていた。私の家は宝仙寺が昭和元年に開設した幼稚園（感応幼稚園 現・宝仙学園幼稚園）の中にあつた。寺の住職が園長、父は主事。母は主任の様な立場だったそうだ。だから私は幼稚園に通つたのではなく、幼稚園に住んでいたのである。

狭い六畳の茶の間の引き戸をあけると、そこは幼稚園の廊下で、左側に保育室が四つならんでいた。突き当たりには遊戯室があり、父が時々長い柄の先に棕櫚しゅうろの毛のついた長ばたきで、天井の煤すすや蜘蛛の巣を取っていたのを覚えてる。私の在園中に、仏教保姆養成所が併設され、突然平屋の小さい園舎が二倍位の大きな建物になったのだが、私は建設中のことを記憶していない。どちらにしても、大学を出るまで、戸をあけ



れば幼稚園の廊下の小さな家に住んでいたのだ。

今も、幼稚園（小学校・短大）は、宝仙寺の森や大きな墓地の北側の低地にある。当時は、森と墓地の間の坂道を下りて、高い檜葉の垣根の間の門を入った。この門柱は、今も残っている。幼稚園の敷地はとても広かった。門を入って右の奥には、広々とクローバーの庭がひろがり、その先は森へ、そして女学校のテニスコートや園芸実習場の花壇につながっていた。また北側には、なかなか立派なプールがあつて、後ろの築山の中腹のライオンの口から水が出るのが珍しかった。門に近い右の辺りには固定遊具があつた。大きな藤棚の下には広い砂場が二面、桐やいちぢょうの木の間には、ブランコ、すべり台、ジャングルジム、遊でん木（遊えん木かもしれない。大きな丸太の木にまたがって、前後にゆらす大きい遊具。今は見かけない）などがあつた。古い園舎は、この辺りの北側に建っていた。門の左側には竹藪や植込みがあり、その先は広

い花壇、いつも花がいっぱいに咲いていた。勿論森の中も子どもの自由な遊び場だった。園の敷地はすべて高い常緑樹の檜葉にかこまれ、その足元には野の草や花がいっぱい生えていた。クラス数は、二年保育が年長・年少二クラス、一年保育が二クラス。たった百余名の子どもの数に、何と贅沢な広さだったことか。

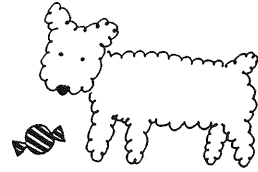
室内で私が一番好きだったのは、自由画帳に女の子の絵を描くことだった。虚弱体質だった私は、外で遊ぶ子どもが圧倒的だった中で、室内にいることが多く、時々先生に「お外で遊びましょ」と誘われた。クラスの先生は大塚先生で、背が高く、いつも優雅で綺麗でやさしかった。食の細かった私は、小さなお弁当箱にわずかなごはんの昼食ももてあまし、いつもぐずぐずしていた。一人残った私の隣に先生はずっと腰掛けて、私に話しかけたり、外で遊ぶ子どもを見たりしていた。「おはいり」の声で皆が入ってくる時になって、やっと解放されたが、「早く食べなさい」とせか

されたり、叱られたりした記憶はない。しかし、主任の母親には毎度叱られていた。

やさしい先生も、目にあまるいたずらや喧嘩をした子どもたちには、本気で怒った。その頃の子ど

も、特に男の子には、いたずらっこ、きかん坊、やんちゃが沢山いて、ボスの子は体格もよく、強かったし、智恵があつた。私たちもそういう子どもには、良くも悪くも一目おいていた。家に帰ると、夕方おそくまで兄弟や近所の年上の子どもたちと群れて遊んでいた子どもたちは、自分たちで充分遊べたし、遊びもよく知っていた。だから先生は子どもたちと一緒に走りまわって遊ぶより、気を配ったり、見守ったりしていただくように思う。

子どもたちは元気だっただけに、スリキズ、キリキズ、コブ、トゲは日常茶飯事だった。そんな時、先生



はすぐ気がついて、赤チンをぬったり、ぬれ手拭いで冷やしたり、上手にトゲをぬいたりした。それを、私たちは先生のまわりに集まって見物し、ごっこ遊びのお医者さんや看護婦さんになって真似をしていた。

この広い、変化に富んだ庭での遊びは、よく覚えている。まず鬼ごっこやかくれんぼはよくやったが、気の小さかった私は、鬼になりたくなかった。もし子どもをつかまえられなかったら、かくれた子どもを見つけてられなかったら、と心配だった。でも結構子どもたちは考えてくれた。たとえば森の中だけのかくれんぼ、クローバーに入ったら鬼だ、かげふみ鬼は、十数えるうちに目なたに出ることなど、いろいろなルールをつくった。手つなぎ鬼もダイナミックだった。鬼が増え、何人もの鬼が横に手をつないで、ねらった子を追いつめるのは面白かった。逃げる方も必死である。それにしても「今年のぼたん」などのわらべうたから、ちゃんばら、戦争ごっこなど終わりが鬼ごっこ風の追

いかけっこになる遊びが多く、そんな時、最後は「ハアハア」息をして、皆でクローバーの中にたおれ込んだものである。すごい運動量だったと思う。

固定遊具もいかに変わった面白い乗り方をするかを競った。サーカスごっこも言った。あまり先生からとがめられたことはなかったが、じっと見ていた先生は、内心心配していたのだろう。さすがにブランコをよじのぼり横棒に手をかけると、大声で注意されていた。当時、木登りは、女の子でも上手だった。

私たち女の子の好きなのは、おままごだった。天気が良ければゴザを持って庭へ出た。季節によって、木蔭で、クローバーや芝生で、すべり台の上で、森の中で、と引越して遊んだ。ごはんの材料は、まわりからいくらでも調達できたし、子どもが毎日摘んでも、草や花や実はなくならない。お皿は落ち葉、箸は枯枝。ままごと遊びの道具はあったが、今のようには豊富ではない時代だったし、毎日がうものを工夫

して遊ぶ方が面白かったと思う。私の唯一得意なことは、お姫さまごっこに使う冠や首かざりなどを、クローバーの花で作ることだった。四ツ葉のクローバー探しも得意だった。皆で競っても、いつも一番だった。

庭で見つけたもので遊ぶことも盛んだった。山吹の茎の芯を抜いて吹き矢にする。桜の幹からにじみ出るヤニを糸のようにのばして、鼻の頭や指につけてはしゃいだ。プラタナスの幹の皮をはぎ、小さくして、土の上の陣取りゲームで使った。今とちがって、地面にいくらでも石や木の先で線や絵が描けたが、それは遊びを面白くした。石けりやジャンケンドンやいろいろな陣取り遊びは、子ども自身で毎日新しい遊びにすることができた。

庭の横にたおした土管やジャンゲルジムも陣地や基地になったが、何といっても一番スリルがあったのは、森の中の洞穴だった。小さい穴だったが、年少組の子どもにとっては恐ろしかった。そこを出入りして

元氣にとびまわる年長組の子どもたちにびっくりした。穴に慣れると、ここを使って、お化けごっこ、戦争ごっこ、山賊ごっこをして、女の子も看護婦さん、お母さん、お化け役で遊んだ。

森や庭には、沢山の生き物がいた。稀に森の中で雉子やイタチらしい動物も見た。蛇はいつものことで、さほど誰も驚かなかった。ギンヤンマや大きいアゲハチョウには歓声を上げたが、何といつても森の中でタマムシを見つけた子どもは、ヒーローになった。しかし生きたタマムシを見つけたことは無い。それでも、緑色で金色や七色に変わって光る虫に皆憧れた。その頃の子どもの本には図鑑がなかったので、先生に見せて話を聞いたが、先生がどんな話をしたかは覚えていない。子どもたちが帰り静かに日が暮れてくると、コモリが飛びまわり、フクロウが鳴き出した。

この豊かな自然の中で元気に遊ぶ子どもたちのために、先生たちは、毎日子どもが帰った後、庭や保育室

を清掃し手入れをしていた。窓や戸の棧、敷居、床板の木の間まで丁寧なきれいにし、よく新聞紙をぬらしてまき、それをはき集めていた。このようなことは、当時はどの家庭でもしていたのだろうが、おかげで古くさい園舎も中はピカピカにみがかれていた。どんなに泥まみれで遊んだ子どもでも、室内では気持ちよく、ねころんだり、はったりしてすごしてほしい、と願っていたのだろう。園庭の遊具も、今より点検が常に必要だったと思う。ブランコをつるすのは縄だったから、切れると大怪我にもなる。すべり台や木の遊具は、ささくれがないか調べる。

室内も砂場も、今のように物であふれていなかった。保育用品や遊び道具も手作りが多かったのではない。バケツに新聞紙で手作りしたねんどがいつも物置にあった。子どもたちもこれでねんど遊びをしたが、先生たちはこのねんどで人形の頭かぶを作り服を縫い、人形劇を作って子どもたちに見せてくれた。人形

劇は子どもたちの大きな楽しみだった。

園長は宝仙寺の住職だったが、同時に女学校の校長であり、仏教の宗派の重要な役職も担っていたので、園の運営は主事である私の父にまかされていた。園長・富田敦純氏は私の父と従兄の関係であったが、親子ほど年が違っていたので、長い間、私は園長を本当の祖父と思っていた。この寺のもつ自然に恵まれた広大な場所を子どもたちに提供し、自然のもつ教育力で子どもたちを育てよう、と考えたのは、この園長だった。寺院の鐘の音が響く自然の中で、自由に走りまわる子どもたちを、自身が信州の山寺で育った時の姿と重ねあわせて見ていたのではないかと感じる。園長は、時々森の中の坂道を下りて、クローバーの庭に現れた。その姿を子どもたちは見つけると、「園長先生」「山羊園長だ」と言ってかけよった。あごに山羊さんそっくりの髭をはやし、眼鏡の中の目が、これまた山羊さんのように細くいつもやさしかった。市

電の事故で右足を失い、松葉杖をつく園長は、歩く時少し痛むのか、「フン フン」と言っていたので、「フン フンじいさん」と真似する子どももいた。そんな時は「アハハハハ……」と豪快に笑うのだった。本当に子どもも好きな園長だった。

戦時中、園庭は、芋畑と南瓜畑になった。戦後間もなくして、養成校は短大になり、小学校が設立され、庭は狭くなった。急増した子どもたちにふまれて、クローバーはたちまち消滅。森は荒れはじめたため、金網がはりめぐらされて出入りができなくなった。それでも、今、森の緑が豊かになったのを見て、ほんの少し嬉しいと思っている。子どもの仏様であるお地藏様が、昔と変わらず園庭の木蔭に立っておられる。

北欧やドイツにある森の幼稚園の写真や記事を見る時、私は、子どもの頃、自分が住み、育った幼稚園を思い出している。

(宝仙学園短期大学名誉教授)

# カリフォルニア滞在記(二)

## — ミルズへ行く —

岩立 京子

カリフォルニアに来て二週間、私たちが新たな生活や学校への適応という目の前の課題解決に奔走している頃、アメリカ南東部をハリケーン「カトリーナ」が襲い、ルイジアナ、アラバマ、ミシシッピなどを含む多くの州が甚大な被害を被っていました。新聞やニュースは悲惨な被害状況を日々報道し、その後、各地で救援活動が展開され始めました。娘が通う公立小学校でもペニー募金やフードドライブ(缶詰を集めて困窮者に送る)が、高校ではカーウォッシュ(寄付するお金を稼ぐために校庭で

洗車する)がさかんに行われ、子どもたちも一人の市民として活動することによって、社会貢献の意味を学んでいくように思いました。こちらでは日常的にポランテイアや寄付が募られ、公立小学校ではノート、ボールペン、ティッシュペーパーから子どもたちのスナックのためのポップコーン、クラッカー(教室に電子レンジが置いてあり、テレビを見る時などに食べる)、使い古しの携帯電話や機械類までいつでも寄付を歓迎するということがありました。いつでもどこからでも集められるだけの資源を集

めて利用することによって、新たなものを生み出した  
り、不可能を可能にしていく積極さは大いに見習いたい  
と思います。

いよいよ明日はミルズに行く日。こちらに来た当初、  
ミルズ大学教育学科長のジェインや助手のアニーと電子  
メールでアポを取っていましたが、約束した日を前に  
「自己紹介はすらすらとできるか」「ミルズでの活動の  
目的などを伝えられるか」「相手の言うことをちゃんと  
聞き取れるか」「バスや電車に乗れるか」など、日本で  
は考えられないようなことに不安を覚えました。

こちらに来てまず感じたのは英語でのコミュニケーションの難しさです。ヒアリングについていえば、スパ  
ニッシュ系、チャイニーズ系の人によって発音も話し方  
も違うし、さらに、当たり前のことですが百人の人がい  
れば百通りの個性的な表現をします。ですから、単語の  
典型的な発音だけ聞き取ればいいということではな  
く、ある範囲内の発音のヴァリエーションを同一単語と  
して聞き取る必要があるということです。また、文法的

に整っていない日常の雑談のような話は聞き取りにく  
く、ヒアリングの力不足を痛感していました。その夜は  
渡米の目的を英文で書いたものを読み返したり、交通手  
段や時刻表、地図などを点検したり、自己紹介の内容を  
頭のなかで繰り返し返したりして興奮していたせいか、な  
かなか寝つけませんでした。

いざ、ミルズへ！

サンフランシスコの街は道路がほぼ碁盤の目のように  
整っており、muniという市電や市バス、ケーブルカー  
が縦横に走っています。「アメリカでは車がないと生き  
ていけない」とよくいわれますが、サンフランシスコは  
muniや近郊電車のBARTをうまく乗り継げばほとんど  
のところへ行けます。私が住むサンフランシスコから  
オークランドのミルズ大学まではmuniやBART、大学  
のシャトルバスを乗り継いで少なくとも一時間半、一時  
間に一本しかないシャトルに乗り遅れると二時間半はか  
かります。午後一時にジェインの研究室で会う約束をし

ましたが、その前にアニーの部屋に立ちより事務手続きをする必要があると思い、その朝は八時に家を出ました。

ミルズへの初めての訪問は緊張の連続でした！ まず、苦労したのがバス。このバスは乗客が停留所に一人もいなくて、その停留所で降りる人がいない（バス内にある紐を引かない）と通過してしまいます。また、バス停は目印となる標識一本すら立っていません、道路に黄色の停止線とバスの番号が書いてあるだけのところも多く、慣れない者にとっては悲しいかな、バスを降りること、ただそれだけに緊張を強いられたのです。また、運転手によっては、停留所でなくても紐を引くと止まって降ろしてくれるので、紐を引くタイミングも難しい！ その日は、早めに紐を引いたらバスが止まってしまい、あわてて「私が降りたいのは次の駅よ」と伝えました。miniの時刻表は全然当てにならず、四十分ぐらい全く電車が来ないし、BARTへの乗り換えもスムーズにいかず、結局、予定していたシャトルに乗れる時間に目的地

には着けませんでした。

時間は十分にあるので、シャトルのバス停を確認してからカフェで温かいカフェオレをたのむと店員が紙コップだけをくれました。私が思わず「何これ？」と聞くと、「コーヒーはセルフサービスだから自分の好きなだけ入れれば、あとは僕がカップいっぱいまでミルクを入れるよ」と言われ、なるほどと妙に感心してしまいました。

ミルズの学生らしき女性たちと一緒にしばらくシャトルを待っていると、ホームページで見慣れたバスの姿が現れました。「これがあのバスだ！ これに乗ればミルズに行ける」とほっとしたのも束の間、運転手から「カードを持っていない人は乗れない」と言われ、「持ってないから、お金を払うわ」と言うと、「お金は受け取れない」と言われました。「じゃあ、初めての人はどうやって乗るのよ!?!」「私は、午後一時に教育棟で教育学科長のジェインと約束しているのよ」と戸惑いながら応え、と、「OK、次からは必ずカードを持ってきてね」と言わ



れ、乗せてもらえました。ハイウェイを十分ぐらい走り、ミルズへ着きました。『Welcome to Mills』という新学期の垂れ幕が下がった門を抜け、図書館の脇を通ってキャンパスへ足を踏み入れた瞬間、鮮やかな緑の芝生、そして、その奥に、歴史を感じるヴィクトリア調の建物が目に入りました。「美しい……」これが私のミルズに対する最初の印象でしたが、この印象は時が経つにつれて、より一層、強くなっていきました。

ミルズ大学は我が国では、フェミニストであり、日本国憲法の起草で人権条項の作成に関与したベアテ・シロタ・ゴードンが卒業した大学としても知られ、一八五二年にその前身である女子の専門学校が設立されました。その当時はカリフォルニア大学やスタンフォード大学は存在せず、子どもを大学に通わせたいと思う親は、東海岸までの危険な旅を強いられたそうです。その後、一八八九年にミシシッピ川以西の大学で初めて女子に学士号を出し、一九二六年には西海岸で初めて附属学校をつくつたり、一九七四年には女子大のなかで初めてコンピュー



▲ミルズホール

ターサイエンスの主専攻をつくったりするなど、女子教育のパイオニアとして評価されてきています。また、一九二〇年代には男女共学の大学院ができ、現在およそ五百人の院生が学んでいます。

### ジェイン学科長と会う

約束の時間の三十分前に教育棟にあるアニーの部屋に行きました。挨拶や自己紹介をした後、早速、シャトルバスの回数券を買う建物へ案内してくれました。その途中、アニーは私の研究について聞いたり、ミルズのキャンパスの美しさや近所で育った彼女の生い立ちについて話してくれました。ミルズは豊かな自然に囲まれた小高い丘の上に作られた大学で、キャンパスにはユーカリの大木が生い茂り、小川が流れ、時折、いたずらっぽく道を横切るリスを見かけます。ミルズホールと呼ばれる最も古いビクトリア調の建物は息を飲むほどの美しさでした。教育棟に戻り、約束の時間にジェインの研究室に行きました。そこには、ジェインと博士課程のリビーがい

ました。みんなでコーヒーをいただきながら、いろいろなことを話しましたが、私がミルズへ来た目的についてかなり具体的に尋ねられました。彼女らは私に対して具体的にどのようなヘルプがどれだけできるのかについて知りたかったのでしょうか。アメリカでは、向こうからこちらの意図や心情を推し量り、気を利かして援助してくれるということは希です。はっきりと意図や要求を主張しない場合は、何も望んでいない、考えていないと解釈されます。これは、二十八年前のアメリカ滞在で私が経験的に学んだことでもあり、アメリカにいる日本人留学生の感想でもあります。

私は、カリフォルニアの保育実践を観察したいので典型的な実践の場をいくつか紹介してほしい、保育者養成のシステム、特に保育実践経験をどのように構築していくかを知りたい、また、日本の保育に関してビデオや資料をもってきているのでこちらの先生に見てもらい、意見を聞きたいことなど、いくつかの内容をメモを見せながら説明しました。ジェインは私の話をよく理解してく

れたようで、附属のチルドレンズスクールでの自由な観察や、評価の高い他のスクールの視察ができるようにアレンジしてくれることになりました。

翌日、昼食に誘われ、オークランド港にある有名なシーフードレストランで昼食をご馳走になりました。チルドレンズスクール校長のスザンヌや院生のメーガンと一緒にメニューを見ながら「何がお薦め？」と聞くと「みんなおいしいよ」というので、アボカドのサラダを頼むと日本の二〜三倍はあるような皿にアボカドやゆでたエビの山盛りのサラダが出てきました。とてもおいしいサラダでしたが、食べきれませんでした。食事中は今時の母親についての呆れる話や、水上の「ポートハウス」について話題になりました。ポートハウスはこちらではよく見かけ、メーガンも幼い頃はポートハウスで育ったということでした。私はその時、具体的にイメージすることできませんでした。後にはサウサリートという港町に行った時に、湾沿いにとっても大きくて立派なポートハウス群が静かに浮かんでいるのを見ることができました。



▲教育学科長のジェインと一緒に

レストランから帰ると、ジェインがチルドレンズスクールのなかを案内してくれ、それぞれのクラスの担任の先生や事務の方や主事さんに私を紹介してくれましたが、ゲイル、ジョーなどファーストネームでの紹介は馴染みがないせいも、その時は全然、憶えられませんでした。

### チルドレンズスクールでの観察

ミルズ大学附属チルドレンズスクールは一九二六年プレスクールとして設立され、キャンパス内の附属学校としては西海岸で最も古い歴史をもっています。一九八〇年からは乳児保育 (infant-toddler care) が開始され、八一年にキンダー、九一年にキンダーから三年生までの小学校が開始されました。また、プレスクールの混合年齢クラスはミルズの学生の子育てのニーズに応える形で九六年から、小学校四年生、五年生クラスは二〇〇〇年につくられるというように、順次、スクールが拡張されてきました。

発達心理学的な立場から遊び中心の保育を提唱しているジュデイスが、アメリカの保育は一般的には行動主義の影響や知的な学習を強調する傾向が強いけれども、その実践は極めて多様で、何が典型かを言いにくいと教えてくれました。アメリカの保育も、ピアジェ、ヴィゴツキー、エリクソンなどの理論の影響、DAP (Developmental Appropriate Practice) の考え方、そして、モンテッソーリやレッジョ・エミリアの実践などから影響を受けつつ変化し、多様になってきているようです。

このスクールの先生方はみな修士の学位をもっており、話していて、なかなかの理論派だと感じるが多々ありました。児童発達や特別支援教育などを主専攻とする院生や学部生などが常時、スチューデント・ティーチャーとして保育に入っています。チャイルドライフ・スペシャリスト、特殊教育教員、初等教育教員の資格取得の要件としてではなく、「理論と実践」などという授業の一環として保育に入りながら研究を進めたり、また、週に一定時間以上働くと授業料が安くなる

授業料免除システムの一環として保育に入るといふこともあるようでした。

私はここで、年長クラス、年中クラス、乳児クラス、混合年齢クラス、K-1クラスの順で観察していきました。こちらでは保育以前に指導計画を書くといふことがほとんどないらしく、あつても、活動名と教材だけの非常に簡単なものようです。ミルズの先生方も指導以前には指導計画を書かず、ミーティング後にドキュメンテーションを書くといふことでした。私はこれまで多くの保育を観察してきましたが、ここでの観察は難しいと思ひました。担任の環境構成や援助の背景にある意図や感情を指導計画から読み取ることはできず、積極的な対話によつて明らかにしていくしかないからです。

乳児クラス、年少クラスの保育では遊具や教材などは異なつても、私がこれまで日本でみてきた多くの保育と同じように、子どもを「知」の主體的な構成者とみて遊びを中心とし、環境構成を重視しているように感じました。先生方は、また、知的、身体的発達の側面ととも

に、社会情緒的な発達や道徳性の芽生えについて重視し、カリキュラムを構成していると説明してくれました。

保育時間は基本的に午前部と午後部を分けて考えるハーフデイプログラムですが、午前部から午後部へかけて残る子どもがいるので、クラスが合同になつて午後部の保育が行われます。昼休みから午後部担当の先生とスチューデント・ティーチャーと交代し、午前部のスタッフはミーティングに入ります。ミーティング後に担任の先生は教室に戻ります。ミルズでは、スチューデント・ティーチャーと担任との打ち合わせは当日の朝に行われ、保育後の昼休みを利用して一時間程度、スチューデント・ティーチャーとのミーティングが毎日行われ、学生に対するメンタリングが丁寧に行われているようでした。

### ミーティングでの体験

年少クラスの観察の後、担任のクリスティンがミーティングに誘ってくれました。ミーティングは担任によつて形式や内容に違いがあるようです。年少クラスの

その日のミーティングは、院生の一人が保育中に疑問に思った事例について記録をあげ、それに基づいて子どもの心情、また、今後、保育者としてどうかかわっていくかなどについて話し合うというものでした。最初にB5判二枚程度に子どもの行動を書いた紙が発表者から配られ、皆が数分で読んだあと、それぞれの意見を交わすというやり方でした。まあ、こちらの院生の発言が活発なこと、活発なこと。内容の全ては聞き取れませんでした。が、私は議論の活発さに圧倒されていました。

すると、クリステインがいきなり私に向かって「あなたはこの事例をどう理解するか」「あなただったらどう対応するか」と聞きました。その事例は私がその日の午前中にみていた子どもであるし、子どもの行動の意図や心情なども推論でき、また、よくある事例なので今後のかわりについても話すことがたくさんありましたが、自分が考えていることの半分も表現できないショックやくやしさを体験しました。自分の考えを主張する動機づけも低いし、構えもなかったのでしょうか。不意をつかれ

て焦ってしまったようです。こちらでは、自分の考えを主張するのが普通であり、主張できなければ何も考えていない、あるいはわからないと評価されます。子どもたちは幼い頃から、何でもいいからとにかく自分の考えを主張することを学んでいきます。現地校に通うある日本人の高校生の話では、ペーパー試験の他にレポート、発言回数、態度、欠席数などを総合して成績がつけられ、要望があれば、いつでもデータベースから情報を開示し、説明してくれるそうです。その高校生は、授業中は何でもいから発言しようといつも考えていると言っていました。

こちらに來た直後、異文化間コミュニケーションで大事なのは「互いの文化に開かれた柔軟な心と、通じ合えるという樂觀さ」などと感じましたが、そんな甘い考えは渡米後一か月で打ち砕かれ、「主張しよう、通じ合おうとする勇ましさ！」なのではないかと思うようになりました。

(東京学芸大学)

## 幼稚園百三十年記念企画 アーカイブズ『幼児の教育』(1)

明治三十四年(一九〇一年)に創刊された本誌『幼児の教育』(創刊より大正七年まで『婦人と子ども』、大正十二年まで『幼児教育』、以後現在の名称)は、現在第一〇五巻目となり、百年以上の歴史をきざんできた。

今年、日本の幼稚園の歴史が東京女子師範学校附属幼稚園創設以来百三十年を迎えるにあたり、本誌の昔年の記事を振り返り、現在の私たちの立ち場所を確認する作業の一助にしたいと思う。まず初回の今号では、昭和三年の『幼児の教育』に掲載された、同幼稚園における、ちようど五月の保育記録を紹介する。

### 朝の一時間

むらねき

八時二十分頃幼稚園の入口にくとと治さんと震一  
さんとが私の来るのをまつてゐた。急いで二人を附  
た。窓ぎわの植木臺の棕櫚竹とスウヰトアリサム籬  
ぎくなどの鉢うゑに水をやる。

添からひきとつて川の組のお部屋へゆくと實習科の  
水槽の金魚や硝子鉢のかたつむり四匹も異状がな  
方たちが八時の授業の前にきれいに掃除をしてあつ  
い。幼児と一緒にお花の水をとりかへに廊下へ出る

と早くからきてゐたのか博久さん恵美子さん卓治さんが遊戯室の方からとび出して来て「先生お早う」と後からついてくる

五人の幼児と長椅子に腰をかけた私は

「皆さんは毎日早くから幼稚園にいらつしやるのね、一度も先生が一等になつた事がない」

といふと幼児はいづれも大得意（この人たちは女學校や小學校のお姉さんと一緒にくるので普通の登園時間よりは一時間も早い）

「皆さんは幼稚園で何がすき」

「遊戯」

と一人が云ふ又一人又一人又一人遊戯の讚美者

博久さん曰く

僕お話も大すき（この人はとくにお話がすきの様で入園當時お話の時だけは附添をはなれた）あゝきのお話随分面白かつた（自分は至つてお話がへたであるが昨日は大きな謎の話で猿や猫や犬鼠にはと

りがつきつきとまりの中にくろげこんで大きなまりはキャンニャアワンチユーコケツコーとところころがる内容形式ともに面白いお話であつたから）

「あゝあの大きなまりのお話ですか先生もあのお話は大すき」

恵美子さん

「あたしも面白かつたわ、おうちへ歸つてお母様にしてあげた、おしまひは忘れちやつて云へなかつた」

治さん

「おさむちやんもお家で話した」

「あゝそう、されから何がすき」

「お辨當も大すき」と震一さんがいふ。

しづかに入り口の戸をあけて益彦さんが入つてきた「益彦さん今日は電車ですか」

ときくと白い小さい歯を出して笑ひながらうなづいた。そばにゐた人たちも



「僕も電車」「僕も省線」

と口々に云ふ

これで七人になつた。

「ゆうべは随分雨がひどく降りましたね」

と話しかけると震一さん曰く

「僕は地震があるかとおそくまでおきてたからあらしをしつてゐる、きのふの地震で僕つぶれるかと思つてにげ出さうと思つた」

ほかの人たちはあらしをしらない様子。

よし子さんが入つてきた。

私のそばに話をしてゐた男の子三人はいつの間にか長椅子のそばへ自分の椅子をもつてきて、電車遊びをはじめた。

義朗さんがよちよちの足どりで入つてきた。

おさむさんは急に思ひ出した様に上衣をあげて

「先生ばんどをしめてきたの、きのふお母様がお姉さまと一緒に三越からかつてきてくださった、夕方

かへつてきたの」

「まあきれいですこと」

おさむさんは随分うれしそうにバンドをいぢつてゐた。繁哉さん克彌さんがきた。二人はすぐにお部屋の中の砂場で遊び出した。

静子さん取子さんがくる。

幼稚園のばあやが幼稚園協會の書留をもつてきた私ははがま口から印を出して受領認におしてゐるとそばの一人は

「僕もお金をもつてゐる」

と云ひ出した。

女の子四人でおにごつこを始めた。

美那子さんと和子さんのぶ子さんゑい子さんが連れ立つてはいつてきた。

旅客用飛行機がはじまつた。博久さんは運轉手になつてつきつきくる人をお客にしてゐる。

一雄さん好禮さんもきた。



おにごっこをしてゐた女の子のかたまりは人数がふえたのでいつのまにかかごめを始めた。

眞土夫さん兼三郎さん庄次郎さんもきた。

お部屋の中は砂場あそび電車飛行機遊びにかごめ遊びと面白そう。

入園開始の今から一ヶ月半ばかりの前を思ひ出し

\*

\*

\*

年少クラスの五月二十八日、規定の登園時間（九

時か）より早く登園した子どもたちと、保育者とのどかなやりとりの様子である。三々五々やつてくる子どもたちの一人ひとり、生活感のある日常の所作をいとなみながら温かくうけとめる保育者の姿。窓際のシユロチク、スイートアリサム、ヒナギクの植木鉢に水をやり、金魚やかたつむりに「異状がない」ことを確かめ、「幼稚園のばあや」がもつ

て幼児お互がこんなによく遊べる様になつた事をつくづくうれしくながめた。

時計を見ると丁度九時二十分

本校の園藝の先生からいたゞいておいた花壇の金盞花と三色すみれを摘みに、皆をつれて出かけた。

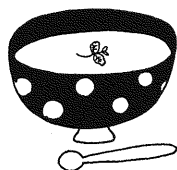
（五、二八）

てきた書留にはんこを押している。

一時間も早く登園してきて、「一度も先生が一等になつた事がない」と得意げに語る子ども。附属の女学校や小学校のお姉さん、あるいは付添いの者と登園してくる者（付添い人待合室というものが附属幼稚園に当時あつた）がおり、三越デパートで「買ってきていただいた」バンドをうれしそうにいじっている子どもなどは、平成の現代ではちよつと

お目にかかれそうもない（室内に砂場があるのも）。当時幼稚園数は千三百、就園児数十万人余という時代、とくに附属幼稚園の子弟は上流家庭の子どもに限られていた。しかし、先生との会話の生き生きさ、いつの間にはじまる電車遊び、おにごっこ、飛行機あそびなどは現代の普通の幼稚園に通じている。それでも、どこか悠長でいいねいな言葉遣い、女の子たちの「かごめ」には懐かしさを覚える。

幼稚園令が布告されて二年、「観察」が保育項目に加わり、型どりの恩物教育は後退し、子どもも自発的な遊びを取り入れようとははじめている時期である。同園における「五月」の保育計画が、右の記録の掲載された二か月前の「幼児の教育」（二八巻四号）に紹介されている（下部  
たみ）。五月の主材は「五月の節句」、「遠足及戸外遊び」、「五月の誕生会」、「五月の庭園及其他」と



なっており、「附」として「お弁当の楽しみ」がある。入園後「漸次希望のものから」お弁当をもってくることになっており、この五月から「殆ど全部揃って」もってくるようになる、とのこと。「漸次」や「殆ど」などのあいまいさがおもしろい。遠足の行先は「陸軍戸山学校」、その他「伝通院」「聾啞学校」への園外保育が計画されている。

きつちりと定められた月案の熟慮性、まじめさが認められる一方で、「朝の一時間」という中途半端な保育時間を記録にしたための態度がある。子ども  
の普段の姿を大切にうけとめる保育観の成熟と、保育者の余裕のようなものを感じる。

（編集部）

☆引用部分は現代仮名遣いに改めた。

# もう いつまで

村石理恵子

子どもがひたすら同じことを繰り返すことがある。それは、予想通りであったり、予想を超えて感じた楽しさを、もう一回楽しみたい、もう一回味わいたいと望み、自らのからだを動かしていく姿である。

## 砂場で

三歳児のA子は、日頃から砂を使ったごちそう作りが好きである。今日はこちらの中からプリンの空きカップを砂場に持ってきた。カップに砂を入れ、それを砂場の縁にひっくり返してみると、プリンの形ができた。二つできたところで私が「おいしそうね」と声をかけると、「うん！」と言いながら更に作り続け、縁に並べていく。砂の状態が丁

度良かったか、形ができやすく、プリンはそのままの状態に残っていく。A子は、今日は自分で食べたたり、人に食べてもらおうとこっそり遊びにするのでなく、作ること自体に熱中している。

少しして、砂場道具の近くにいたB美が、砂場の中に入ってくる。B美は、A子のやっていることに興味をもち、A子に「(カップを)貸して」と手を出す。A子はB美にカップを渡した。同様に、C夫も関心をもっている様子であり、そばで見ている。A子は、B美が作るのを見ていた。B美も同じように縁にカップを伏せた。そしてカップを上を持ち上げてみると、きれいな形ではなく、上部が少し崩れていた。ちよつとした間があったあと続いてもう一回B美が作る。今度のはプリンカップの形通りになっていた。B美は、ふつと安心したような表情になった。その様子を見たA子が「はい、いいでしょ」とB美に声をかけた。するとB美はすつとカップを渡す。

再びA子がプリンを作り、縁に置いていく。砂場の縁にずらりと十個以上並んでいる。それを見て、私は「たくさんあって、どれもおいしそう。もつと作るの?」と声をかけた。すると、「そう、いっぱい作る」とA子は意気揚々とした様子である。

しばらくすると降園時間が迫り、周囲は片づけているが、A子はやめようとしなない。そこで「おしまいはいつ?」と聞くと、「まだまだずっと。みんなのぶん作る」とやめるつもりがない。その様子を見聞させたB美や他の友だちは、片づけを強く主張しなかつた。今まではA子がちそうとして作ったものを食べる仕草をして「ちそうさ

ま」。そうすれば、次は崩して片づける、というような遊びの区切りがついていた。しかし、今日の様子から、A子が納得がいくまでやった方がいいと思ひ、私も「ごちそうさま」と崩すことを促さなかった。そしてA子が「みんなの分」といったのが、既に「A子の家族の分」より多く、二十個近くあったので、「(プリン)数をかぞえてみようか。一、二、三……」と私は声に出してかぞえてみた。すると十八個あった。近い数として、学級の人数が二十名である。そこで、「〇〇組のみんなの分なら、あと二個だね」と声をかけると、A子は「うん」と返事をしながら作る。では学級のみんなの分かな……と思ひながら待ち、二十個になったところで、「これでおしまい?」と私が尋ねると、「ううん、まだ。」と言う。「みんなの分」は二十個ではなかったのだ。予想は外れ、更に延長戦に入るらしいA子の姿に感心しながらA子の納得のいくまでそばにいたいと思つた。が、同時に担任として降園準備を進める必要もあり、私は一旦保育室に戻ることにした。A子自身の納得する時がくることを信じて「自分でおしまいにしてきてね」と話しかけると、「うん」とうなずく。

少し経って、保育室にA子が戻ってくる。ああ、やっぱり自分で納得したんだ、と思つた時、A子が「おしっこ……」と言ひながら、保育室を通り抜けてトイレに向かうとした。やめたのは用便のためであった。私はちよつと気が抜けたのだが、A子のその表情は満足感に満ちていた。自分なりに精一杯繰り返して作つたのだ、という笑顔であった。最後は生理的な理由ではあるが、本人としては「おしまい」の区切りがついた

ようである。トイレから戻ったA子に「いっぱいできたんだね」と声を掛けると「うん！」とうなずく。そして、実は日によっては、片づけて降園の身支度をする、という流れの中で、片づけない、自分でカバンを持ってこようとしない、といったこともある。A子が、笑顔のまま身支度に取りかかったのである。砂場を見ると、あとには、プリン型になった砂が列になって残っていた。

降園後、掃除を始めた私は、砂場の縁に並んだプリンが愛おしくみえた。A子が繰り返ししている姿を思い出して、同僚と一緒に「よく作ったね」と感心しあった。同じことを繰り返してA子は楽しかったことが伺える。それがあとに残っている時には、その「残されたもの」にちよつと見惚れてしまう感じである。この日は周囲にいた友だちは少なかった。また途中で少しだけ加わった友だちもいたが、とにかくできあがったものを壊すような雰囲気はなかった。砂場という繰り返し壊し創造する場所であったが、このような同じものの繰り返しを楽しんでいる場合、完成した状態であっても途中であつても、もういっこ、もういっこという意気込みの過程やその結果を見た友だちは壊す気にはなれないでしょう、と私たちは話しあつたのである。

### 枇杷の実

同じ頃、園庭の枇杷の木に実つた実を、とっては食べ、とっては食べ……、という姿が見られ



た。めざとく見つけた年長の子どもが食べ、そのおいしさは「実がなっている」とつて食べていい」と三歳児にも伝わってきたのである。枇杷の木には、たわわに実った実がいくつもいくつもついている。まだ堅い実は枝からとるのに苦勞するが、柔らかい実ならば、枝から自分の手でとるのは、三歳児にとつても割合と簡単であった。そして甘く、やわらかなその味は、次々にリピーターを呼んでいた。中にはお母さんにも食べさせたくて、こっそりポケットに入れていた子どもも何人かいた。何日かすると、枇杷仲間のようになり、年長の子どもが枝に登つてとつてくれたり、枝をひっぱつてとりやすい位置に下げてくれたりした。皮のむき始めを手伝え、あとは「自分でできるから」と、私たちの手伝いをことわった食いしん坊たちが「もういっこ食べたい」「もういっことる」「もういっこ！」と次々に枇杷を味わっていた。豊作だったのである。

果汁を垂らしながら実を食べる子どもの中にD太がいた。日頃やや不安定な姿もあり、遊びの中で自分から「もっと〇〇したい」という要求を表しにくい、遠慮がちに自分の居場所を探しながら過ごしているともいえるような子どもであった。そのD太が、「もういっこ！」と要求したのである。私は嬉しかった。「そう、おいしい？　もういっこ食べたい？」と声をかけ、次の実を採れるように「どれがいいかな」と、枝をひっぱった。D太が実をとつて笑顔になったところで、私の「秘密」をD太に話すことにした。

私は、枇杷を食べると舌がしびれ、喉がいがいがとして閉じていく感覚になる。「枇杷アレルギー」らしいのである。私が「アレルギーで枇杷は食べられないの」と伝える



と、D太はとても驚いていた。そして驚きながらも安心した表情になった。自身の体質から、共感したのだ。秘密を打ち明けて、私もほっとした。D太は自信をもったような笑顔で「ぼくは、食べられるよ」と言った。保育者が同じことをしなくても、別の意味では「できない」からこそ、要求を表したことの意味や意義、私が嬉しいと思っていることがD太に還っていったような気がした。

D太だけでなく、子どもは今どきならではの内的外的な制限で、我慢をしたり、ためらったり、無理をしたりするのもかもしれない。そんな中、「もういっこ食べたい」と思い切り気持ちを出せ、それを叶えてくれる枇杷の豊作は、子どもにとっても保育者にとってもありがたいものであった（……食べられないのを知っていて、私の目の前でいたずらっぽく笑いながら枇杷を食べる同僚がいたのも、いい思い出になる）。

砂場のA子も、枇杷のD太も「もういっこ」という思いがあった。子どもが同じことを繰り返す行動には、一つのことには楽しさを感じ、同じことを求める素直な心の動きがある。その心の動きは、素材や対象が、その楽しさをもたらす恵みを繰り返し与えてくれることで、しっかりとした安心感や満足感へとつながっていく。その恵みに感謝しつつ、そばにいてそんなふうに関心を動かす、からだを動かしていく子どもたちの姿を「もう一回」「もう一人」と思う私である。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

# 編集後記

日本の最初の幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）設立から今年がちょうど百三十年にあたることを記念して、「アーカイブズ幼児の教育」という企画をたてた。戦前の『幼児の教育』の記事を折に触れて転載し、幼児期の保育・教育のなしてきたことを振り返ればと思う。初回が五月号掲載ということなので、「このほり」や「端午の節句」にちなんだタイトルをさがしていたら、今から七十八年前の五月末の「朝の一時間」という記事に出会った。通常の保育時間が始まらないうちの、なにげない朝のひと時の記録である。日本は教師による実践研究が欧米

と比較しても活発であるらしい。大正期から、授業の実践記録や子どもの作文などの生きた資料を駆使した実践研究が、日本の教育学の重要な一端を支えてきた。そこには、机上の教育論議もしくは欧米移入型の知識ではあきたらず、真の教育の創生には子どもたちの生活や子どもと共に過ごす教師の思いこそ重要なのだという、教育研究者の決意が感じられる。そうした時代の思潮、教育者の誇りのようなものが、「朝の一時間」を書かれた「幼稚園保育母の」むらさき先生にも反映しているような気がする。しかし、気負いはなく、いかにも自然な、愛情のあるやりとりである。

\*ご意見、ご投稿お待ちしております。  
す。

yujimati@yahoo.co.jp (浜口)

## 幼児の教育

第一〇五巻 第五号

(二〇〇六年五月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十八年五月一日

編集兼発行人 浜口順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-12-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―一一一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

好 評 発 売 中 !

子どもはどのようにして

〈じぶん〉を発見するのか

子どものことばと時間と空間と

岩田純一 著

子どもは、こんなにもいきいきと  
「あした」を思い描いて、  
自己を育てていく…



19×13cm 231頁  
定価1,680円(税込)

子どもたちは、「きのう」より「きょう」を懸命に生き、これからやってくる「あした」を思い、未来に向かって生活しています。では、子どもは生まれて成長していくなかで、「きのう」の〈じぶん〉は「きょう」の〈じぶん〉と同じであり、「あした」も同じ〈じぶん〉が続いていくという認識を、いつ、どのようにして獲得していくのでしょうか。豊富な保育のエピソードをとりあげて、子どもたちの育つみちすじを考えていきます。

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

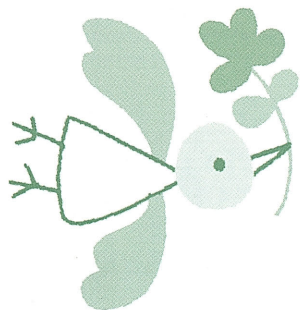
好評発売中!

# 子どもの心が かがやくとき

これからの幼児の育ちを考える

漆原智良 著

戦災孤児として戦後を迎えた著者が、自らの体験をもとに、「子への愛情とは何か」をわかりやすく説いています。子どもへの愛情の示し方から、悩む保育者への優しさあふれるアドバイス・絵本の読み聞かせまでを感動的に織りなし、保育・教育・育児にかかわるすべての方々へ贈ります。



## ●目次から

- 第1章 ハマユウの花のように  
—わが半生から学んだ幼児教育
- 第2章 幼児との温かい心のふれあい  
—保育者のひとことが子どもを伸ばす
- 第3章 『読み聞かせ』を楽しむために
- 第4章 保育の悩み相談 Q&A
- 第5章 スピーチの基本ABC
- 第6章 月別『書き出し』文例集

21×15cm/256頁  
定価1,365円(税込)

キンダーブックの

## フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。